〔大東文化大学所蔵日本書跡解題〕（監修・髙城弘一　教授）

古筆手鑑

野中直之・髙田智仁・西片由貴
大澤一輝・栗原早紀・小林大泰
染谷慶子・李輝

【解題】

大東文化大学図書館蔵「古筆手鑑」の解題は、表面二回・裏面二回の計四回に分けて掲載を予定する。そのうち二年目にあたる本年度は、表21面の「38大覚寺殿義俊」から表面末の「66徹書記正徹」までの二十九葉を扱うこととする。また、本解題は野中直之が責任編集をし、髙田智仁、西片由貴、大澤一輝、栗原早紀、小林大泰、染谷慶子、李輝の計八名による分担執筆によって行う。（各断簡の末尾には担当者名を記した。）

本解題の執筆にあたり、書誌学的にも史料性の高い散逸物語『夜の寝覚』の未詳部分とも思われる断簡（「52冷泉殿為秀」）が収められていることが判明した。そのため、詳細については『汲古』六十六号にて、紹介および報告を行った。（野中直之「伝冷泉為秀筆未詳物語断簡考―『夜の寝覚』の中間欠巻部分の可能性について―」汲古書院　二〇一四年十二月）。

前号に引き続き、本解題内にて掲載する図版の縮尺率は一定ではない。特に掲載図版が小さくなってしまう断簡もあるが、『大東文化大学所蔵　貴重書跡図録目録Ⅰ』（大東文化大学大学院文学研究科書道学専攻　二〇一一年）に一部拡大した図版の掲載があるため、本解題では省略することとする。また、本手鑑の全体像及び付属品である「筆者目録」、「古筆手鏡（ママ）目録」の図版も同書に掲載しているため、同じく省略している。（野中）

【凡例】

本解題の各古筆切における丸付き数字ほかは以下を示す

①極札の表書の翻刻及び鑑定者名
②料紙の紙質
③法量（縦×横）
④出典（和歌番号などは原則として『新編国歌大観』に準拠した）
⑤推定書写年代
⑥伝称筆者の出自及び生没年

［翻刻］（判読不能な場合は推定文字数分「■」で充当した）
［補考］（ツレに関する情報等）

一、名葉集類の内、『古筆家秘蔵』・『古筆切目安』・『古筆名葉集』・『増補新撰古筆名葉集』については、伊井春樹『新版古筆名葉集』（和泉書院　一九八八年）によった。

一、『古筆切名物』については、武田則夫「翻刻　古筆切名物」（『ＭＵＳＥＵＭ』二三六号　一九七〇年）によった。

一、『昭和古筆名葉集』については、髙城弘一『覆刻　昭和古筆名葉集』（大東文化大学人文科学研究所　二〇一二年）によった。

一、本解題の執筆に際して、『古筆学大成（全三十巻）』・『古筆手鑑大成（全十六巻）』・『日本書蹟大鑑（全二十五巻）』・『徳川黎明会叢書　古筆手鑑篇一～五』・『古筆切影印解説（全四巻）』・『国文学古筆切入門（三部作）』・『古筆切資料集成（全六巻）』・『平成新集古筆名葉集一～五』などに代表される、古筆切及び古筆手鑑の影印・翻刻本について、古筆切研究の根幹資料として周知の文献であると判断した場合には、原則として、著者（編者）や出版社名、刊行年次などの指摘を省略した。

表21（38大覚寺殿義俊）

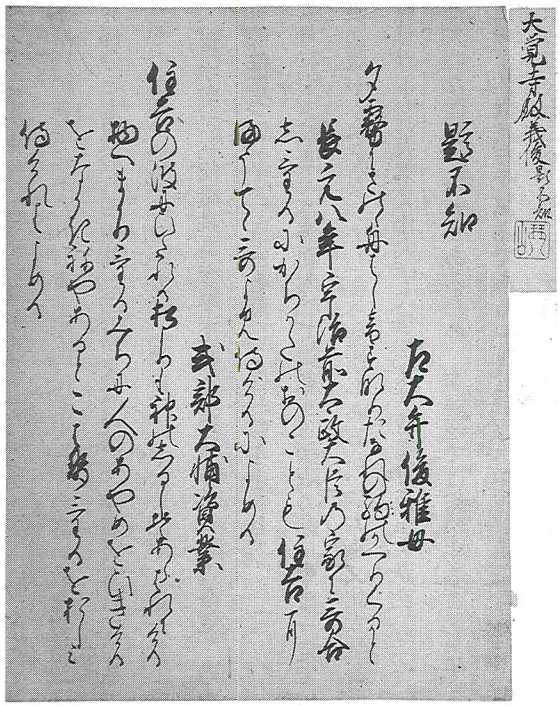


表22（39秋田城之助実季　40五辻殿為仲）

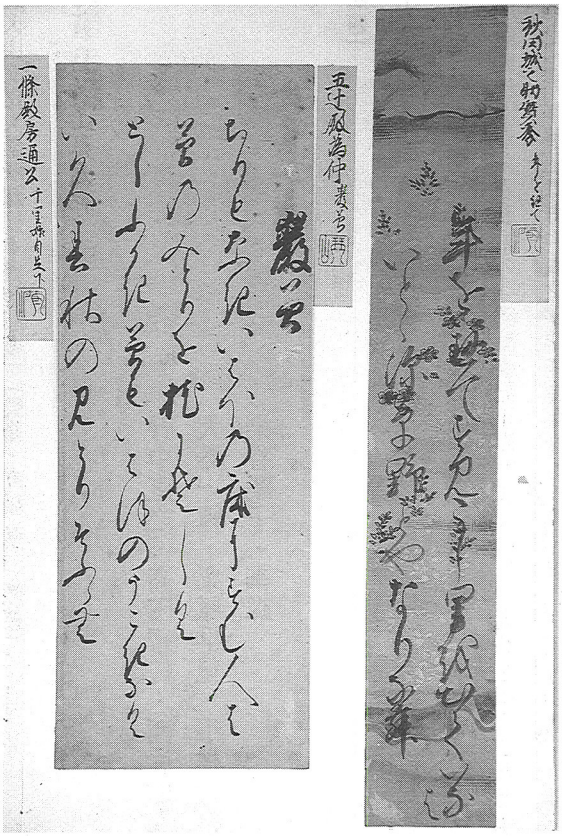


表23（41一条殿房通公　42鷲尾殿隆量卿）

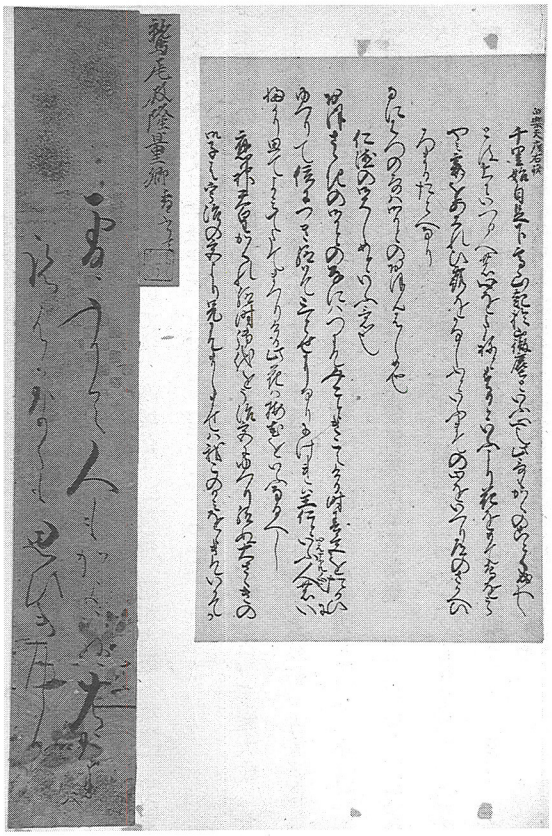


表24（43二条家為世卿　44二条家為忠卿）

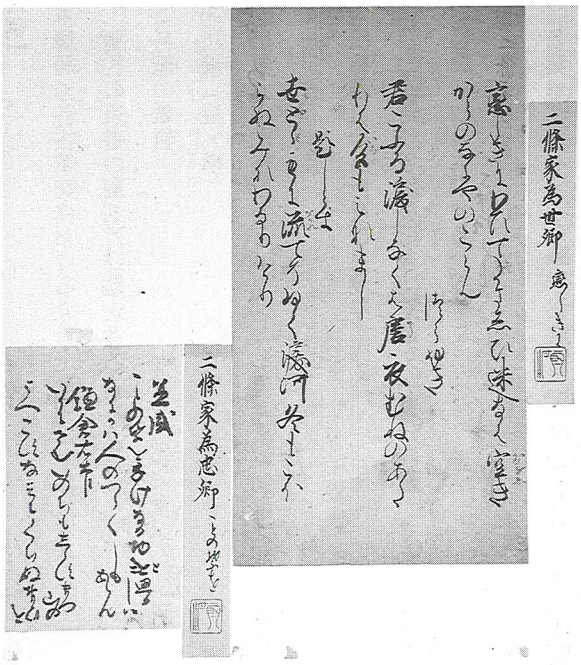


表25（45二条家為遠卿）

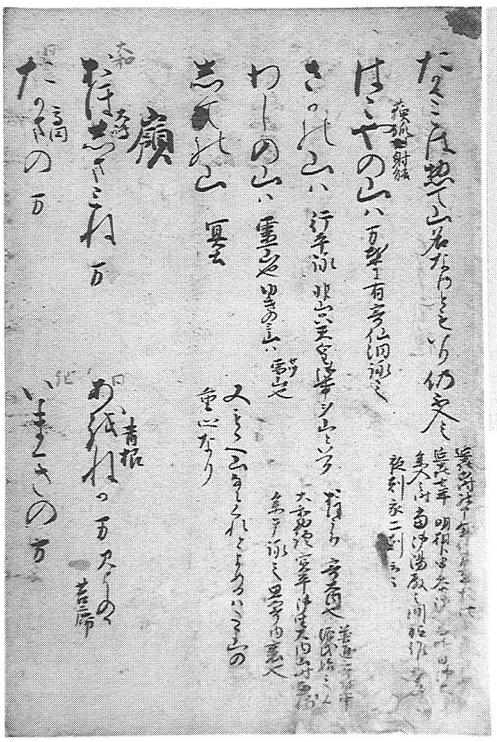


表26（46二条家為兼卿）

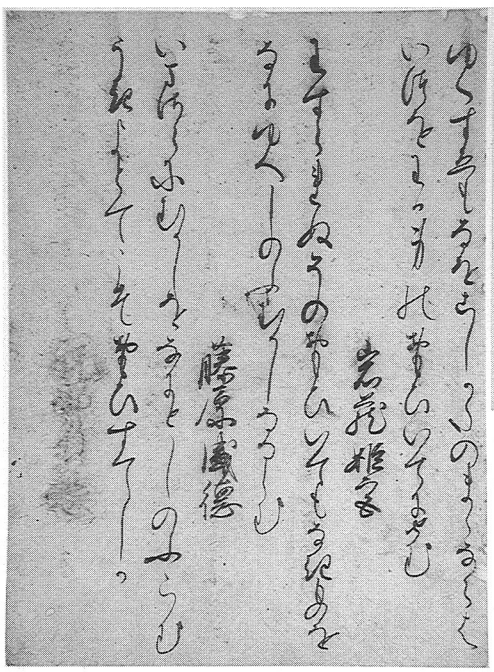


表27（47二条家為重卿）

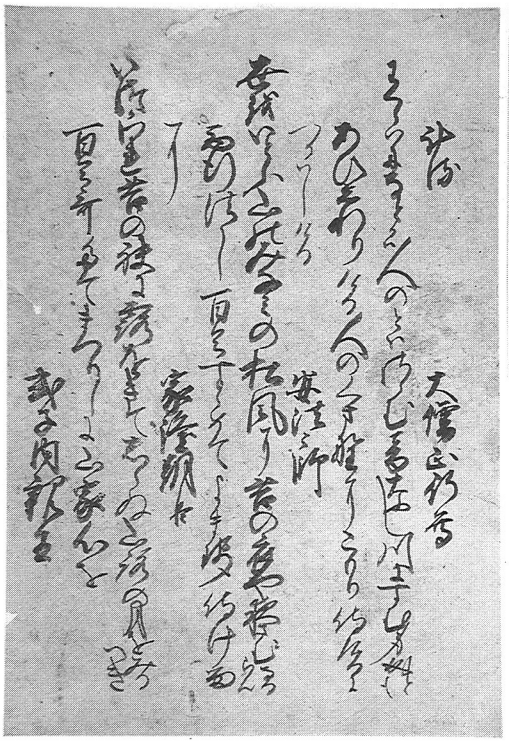


表28（48覚源法印）

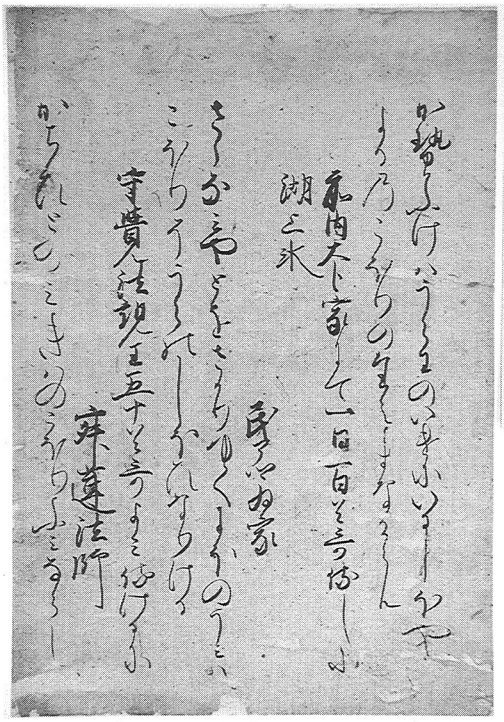


表29（49二条家為右朝臣）

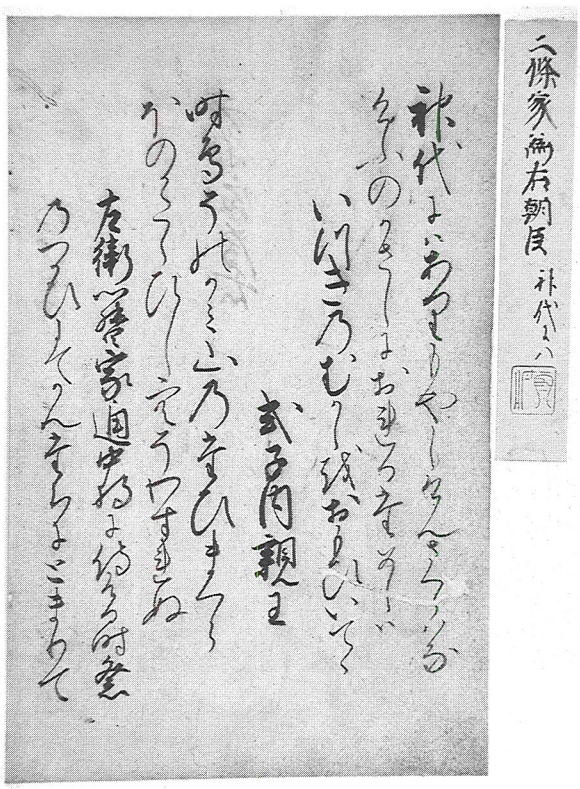


表30（50仁和寺殿道永　51冷泉殿為相卿）

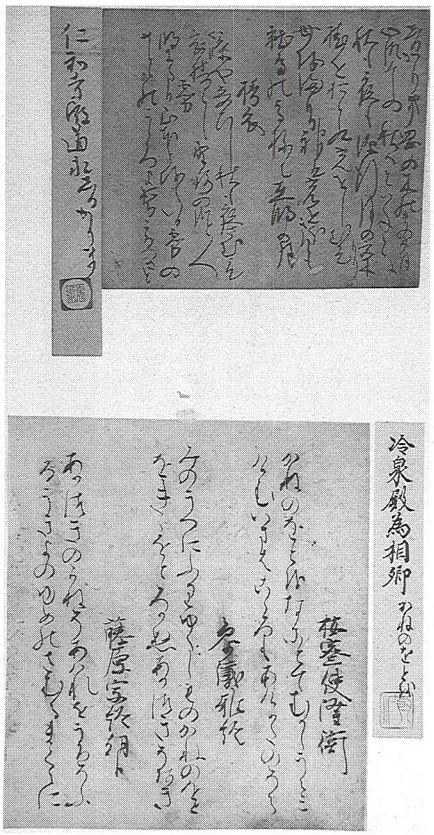


表31（52冷泉殿為秀卿　53二条家為定卿）

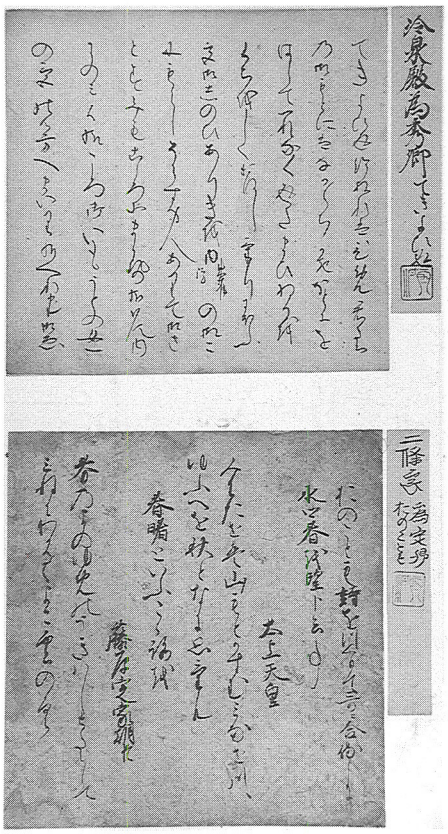


表32（54高雲軒明融）

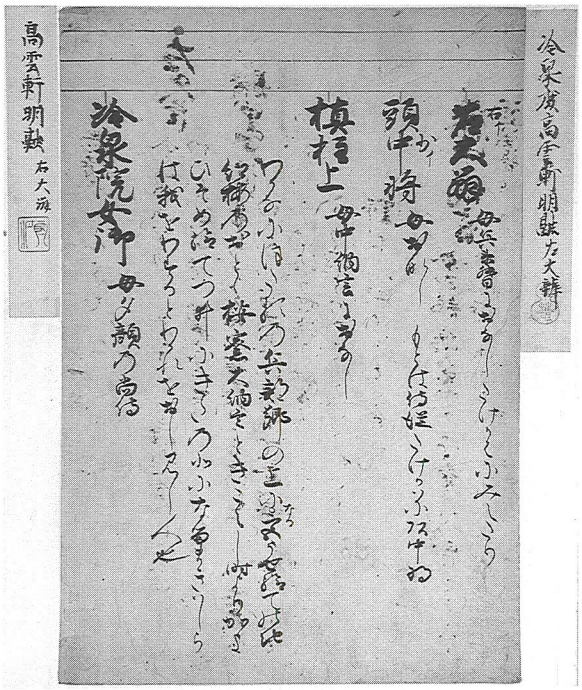


表33（55下冷泉殿持為卿）

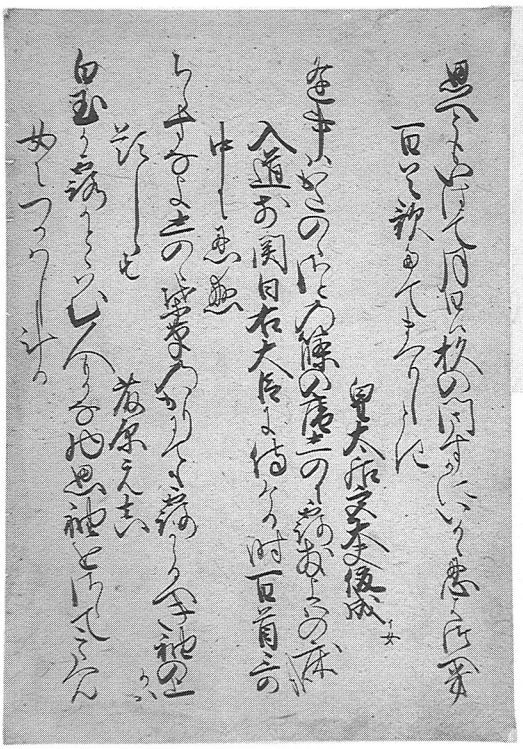


表34（56西行法師　57慈鎮和尚）

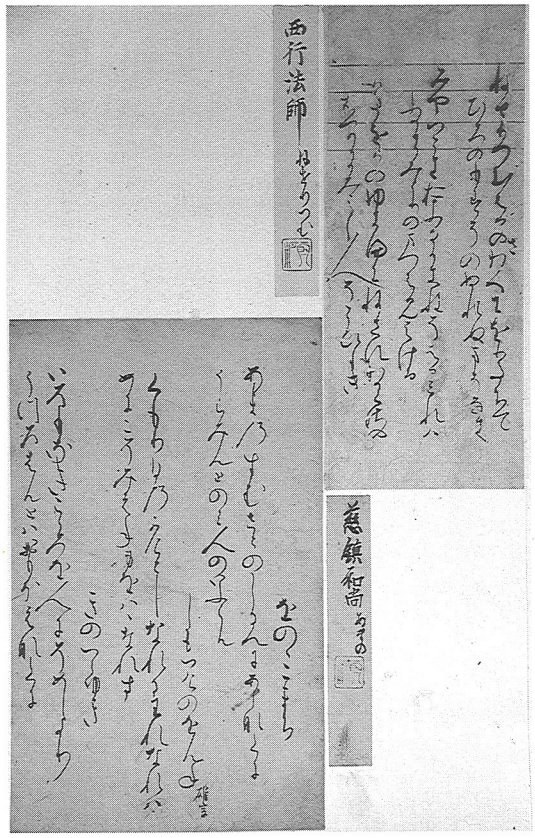


表35（58藤原秀能）

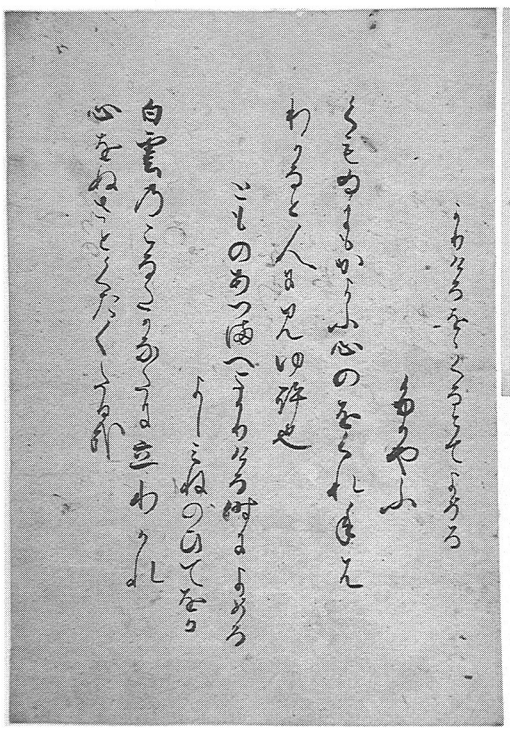


表36（59甘露寺殿資経卿）

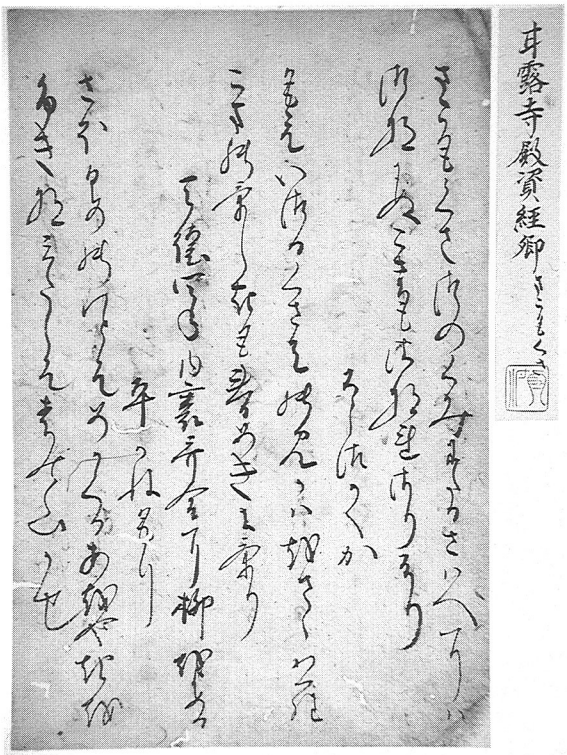


表37（60世尊寺殿行能卿　61後小松院）

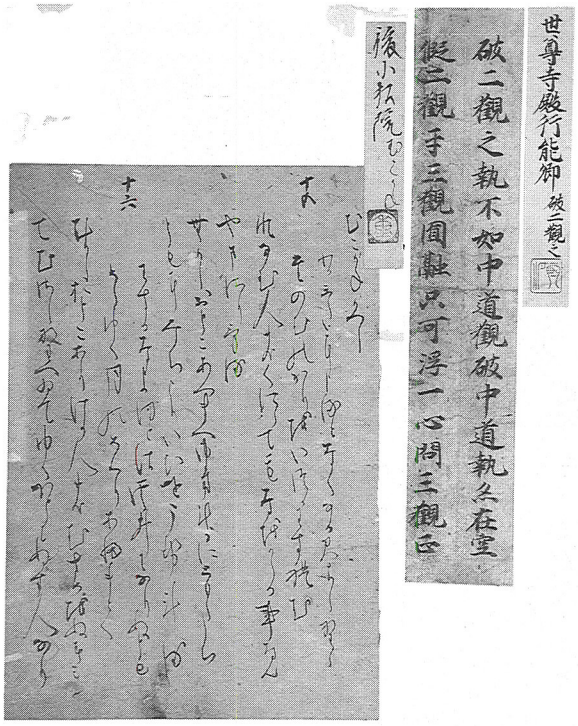


表38（62頓阿法師）

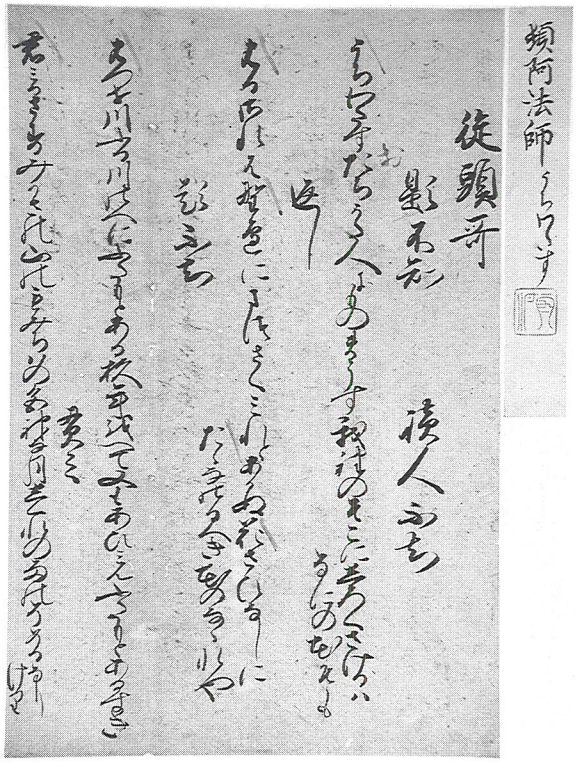


表39（63兼好法師）

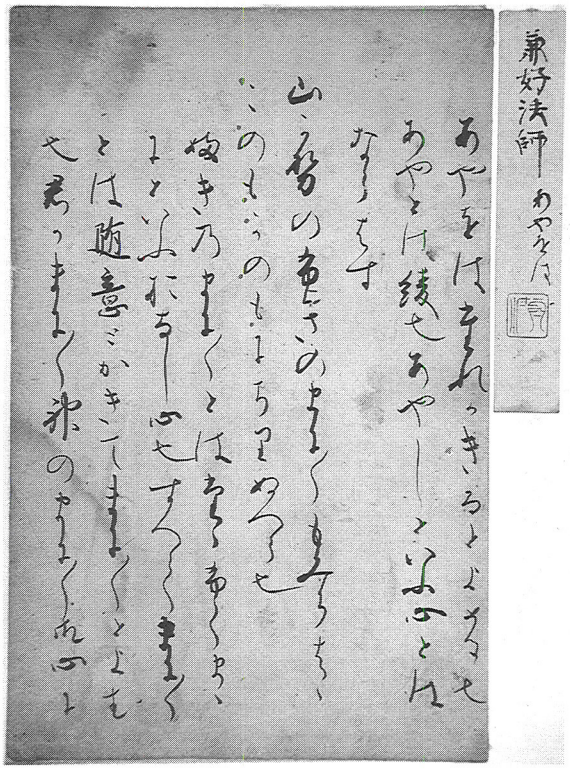


表40（64浄弁律師）

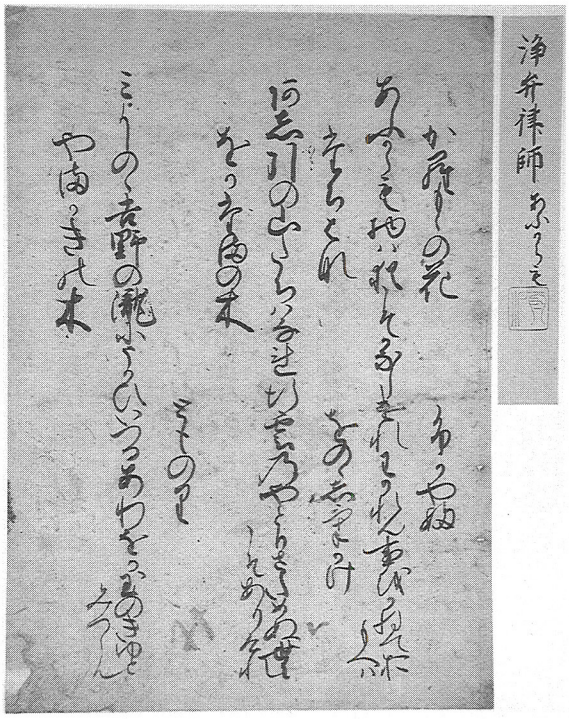


表41（65慶運）

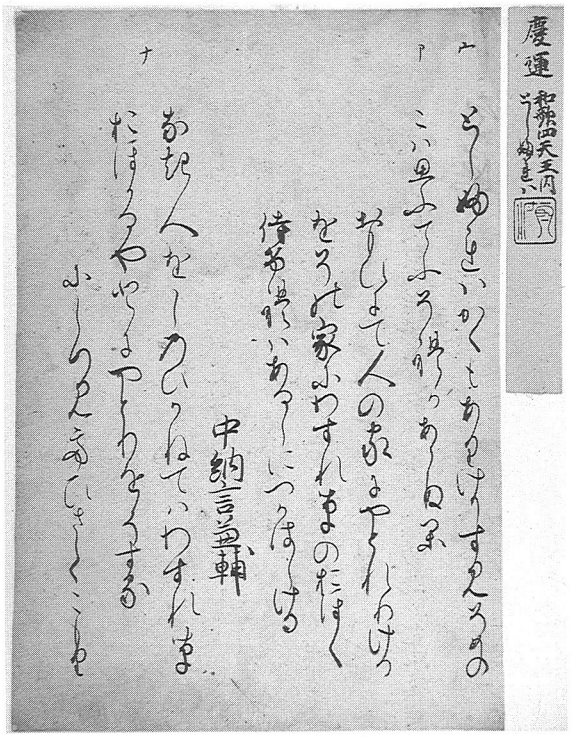
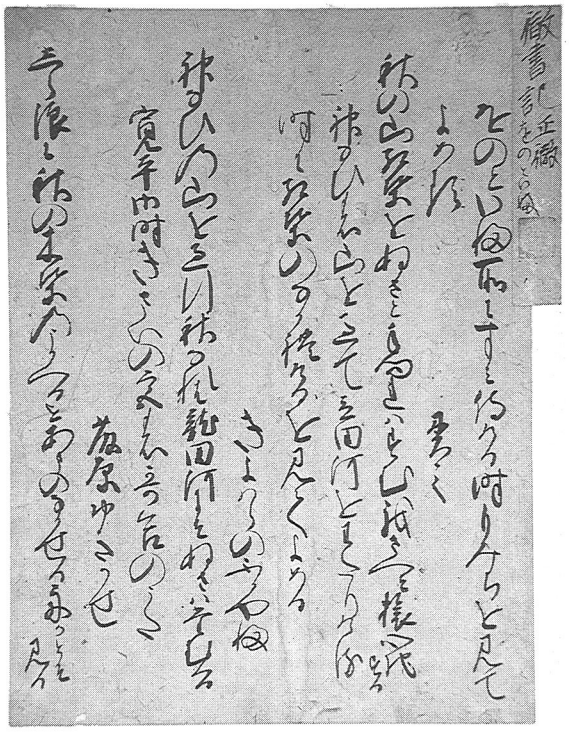


表42（66徹書記正徹）



38　大覚寺殿義俊　四半切〔詞花集〕

①「大覚寺殿義俊 題不知 山琴（黒）」二代古筆了栄
②斐紙
③二六・七×一九・四センチ
④詞花和歌集　三二八～三三〇詞書
⑤室町時代
⑥義俊（近衛尚通男、大覚寺門跡、一五〇四―一五六七）

［翻刻］

題不知

左大弁俊雅母

夕霧にさの、舟はし音すなりたなれの駒のかへりくるかと

長元八年宇治前太政大臣の家に哥合

しけるにかちかたのおのことも住吉に

まうて、哥よみ侍けるによめる

式部大輔資業

住吉の波にひたれる松よりも神のしるしそあらはれにける

物へまかりけるみちに人のあやめをひきける

をなかきねやあるとこはせけるをおしみ

侍けれはよめる

［補考］

ツレは『古筆切影印解説』、醍醐寺蔵「手鑑」、手鑑「玉海」（徳川美術館蔵）、手鑑「世々の友」（岡山美術館蔵）において、一葉ずつ確認することができた。本断簡の筆跡は、全体的にふくよかな筆致であり、漢字は仮名に比べて

やや太めに書かれている。また『古筆学大成』に個人蔵の「古筆手鑑」中のものとして伝称筆者未詳の「詞花和歌集切」が見られる。室町時代のものとして相応の特徴を有しているが、ツレとはみなさない。（小林）

39　秋田城之助実季　短冊

①「秋田城之助實季（年を経て）［村守］（黒）」分家三代古筆了仲
②斐紙（雲紙に金泥と墨の下絵）
③三七・八×六・〇センチ
④古歌（古今和歌集九七一　詠者：在原業平）
⑤江戸時代初期
⑥秋田実季（常陸宍戸藩主、安東愛季次男、一五七六―一六六〇）

［翻刻］

年を経てすみこし里を出ていなは
いとゝ深草野とやなりなむ

［補考］

『古今和歌集』所収である在原業平の和歌を書した古歌短冊。本短冊は古歌短冊の書式に従って豪華な料紙を用いている。また和歌の下の句を一字下げ、署名もない。そのため、秋田実季の自筆である確証はない。島根・美保神社蔵「手鑑」や手鑑「集古帖」（徳川美術館蔵）、手鑑「披香殿」（川崎市民ミュージアム蔵）には、同じく伝称筆者を実季とする短冊および色紙が見られる。（野中）

40　五辻殿為仲　四半切〔私家集か〕

①「五辻殿為仲（巌苔）［山琴］（黒）」二代古筆了栄
②斐紙
③三二・二×一一・八センチ
④自詠の未詳私家集か
⑤室町時代
⑥五辻為仲（滋野井季国次男、五辻諸仲養子、一五三〇―一五八五）

［翻刻］

巌苔

ちりもなきいはほの床にすむ人は
苔のみとりを枕にそしく
としふかき苔もいはほのうこきなく
いく春秋のみとりそふらむ

［補考］

五辻為仲自詠の未詳私家集か。もとは巻子本。ツレは確認することはできなかった。『日本書蹟大鑑』に三葉、手鑑「霜のふり葉」（徳川美術館蔵）に一葉、それぞれ署名入りの自筆短冊が紹介されており、それらと比較したところ、同筆であると判定した。本断簡に書かれた二首の歌を探したところ、『五辻為仲集』に該当する歌が確認できなかったため、為仲の未詳の私家集と推定した。「巌苔」の部分は紙が擦れて、文字が少々消えている。最終行三文字目「春」の左側に、次の歌の一部と思われる線を確認できる。次の歌と非常に接近した部分で切られたことによるものと考えられる。（栗原）

41　一条殿房通公　四半切〔未詳〕

①「一條殿房通公千里始自足下　村守（黒）」分家三代古筆了仲
②楮紙
③二七・〇×一五・六センチ
④未詳
⑤室町時代
⑥一条房通（関白、一条房家次男、一条冬良婿養子、一五〇九―一五五六）

【翻刻】

白楽天座右銘

千里始自足下高山起於山微塵といふ心也此哥もかくのことく成へし
とは上にいへる人の心をたねとするといふより花をめて鳥をうら
やみ霞をあはれひ露をかなしふといふまての心をいへり道のさかへひ
ろまるたとへなり
なにはつの哥は御かとのおほむはしめ也
仁徳の御はしめといふ意也
おほさゝきの御かとのなにはつにてみことときこえける時春宮をたかひに
ゆつりて位につき給はてみとせになりにけれは王仁といふ人のい心元ナカルノ心也
ふかり思てよみてたてまつりける此花は梅花をいふなるへし
應神天皇かくれ給時御代をう治宮にゆつり給ぬ大さゝきの
御子は宇治の宮より兄にてましませは我このかみをゝきていかてか

【補考】

管見の範囲では、本断簡の書写内容を断定することはできなかった。本文の注には「白楽天座右銘」とあり、その一節を引用し書き始めている。しかし本文は、『古今和歌集』仮名序の引用およびその注釈であり、王仁の歌「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」の前文部分である。ツレは見出せないが『古今和歌集』の注釈書の類か。また石川県立美術館蔵「手鑑」所収で、伝称筆者を同じく房通とする謡曲「誓願寺」の断簡と筆致が類似することにも注目したい。

（染谷）

42　鷲尾殿隆量卿　短冊

①「鷲尾殿隆量卿雪ふりて　山琴（黒）」二代古筆了栄
②斐紙（金銀の砂子に青雲母の紋様擦り、金泥と呉須の下絵）
③三七・三×五・七センチ
④古歌（古今和歌集三二九　詠者：凡河内躬恒）
⑤江戸時代前半
⑥鷲尾隆量（広橋兼勝次男、鷲尾隆尚養子、一六〇六―一六六二）

【翻刻】

雪ふりて人もかよはぬ道なれや
跡はかなくも思ひきゆらむ

【補考】

『古今和歌集』所収である凡河内躬恒の和歌を書した古歌短冊。本短冊も古歌短冊の書式に則り、下の句を一字下げ、署名はない。そのため鷲尾隆量の自筆である確証はない。ただし現在確認できる真筆と比較すると、太細の変化や比較的下へ下へと流れる連綿などは共通する。

（野中）

43　二条家為世卿　四半切〔古今集〕

①「二條家為世卿恋しきに　村守（黒）」分家三代古筆了仲
②斐紙
③二三・九×一二・五センチ
④古今和歌集　五七一和歌～五七三
⑤鎌倉時代
⑥二条為世（二条為氏男、一二五〇―一三三八）

【翻刻】

恋しきにわひてたましひ迷なは空き
からのなにやのこらむ
つらゆき
君こふる涙しなくは唐衣むねのあた
りは色もえなまし
題しらす
世と丶に流てそゐく涙河冬もこほ
らぬみなわなりけり

【補考】

『古今和歌集』の断簡。もとは冊子本。『新撰古筆名葉集』には、「四半　古今哥二行書　朱書入少アリ」と記されており、おそらく本断簡を指すものと思われる。ツレは確認することができなかった。同じ伝称筆者であり、また同筆と思われる『古今和歌集』の断簡を『古筆学大成』に二葉確認したが、書写形式は異なっている。本断簡には、朱による振り仮名として「た」「むなし」「から」「いろ」「と」「なかれ」を確認し、また三首目二字目の「と」の右隣にも小さい「〇」を確認した。

（栗原）

44　二条家為忠卿　八半切〔続後拾遺抄か〕

①「二條家為忠卿ことのはを　村守（黒）」分家三代古筆了仲
②楮紙
③一二・一×七・五センチ
④続後拾遺和歌集　七九八、八八一
⑤鎌倉時代
⑥二条為忠（二条為藤男、?―一三七三）

【翻刻】

兼盛
ことのはをなけなる物を思ひ
なにかは人のつらくしも
鎌倉右大臣
いかにせむいのちもしらすまつ
うへこすなみにくちぬおもひ

【補考】

本断簡は『続後拾遺和歌集』の定本と比較すると歌が続いていないため、抄出本の類か。もとは冊子本。伝称筆者を為忠とする『続後拾遺集』の断簡は、『古筆学大成』に「続後拾遺集切」が二種、『平成新修古筆資料集』にはさらに別の一種の計三種確認できる。しかし、いずれの断簡とも一致せず、また抄出本も確認できなかった。本断簡とのツレは見出せなかった。

（大澤）

45　二条家為遠卿　四半切〔八雲御抄〕

①「二條家為遠卿（たかさこは）　村守（黒）」分家三代古筆了仲
②楮紙
③二二・三×一四・八センチ
④八雲御抄
⑤南北朝時代
⑥二条為遠（二条為定男、一三四一―一三八一）

【翻刻】

たかさこは惣て山名なりともいり仍不入之　延喜御時被申叙位間事於法■■■■
はこやの山は（鏡狐■射能）万葉に有寄仙洞詠之　延喜七年 明朝臣申参御寺而昨日御大■
参入之時當御湯殿之間祇候奉仰■
夜刻亥二刻云々
さかの山は　行平詠　非山只天皇御事を山といへり
わしの山は霊山也ゆきのみ山は　雪山也（ヤツ）
おほうち　寄大内也（為通宮中殿長初之歌）
大和物語寛平御坐大内山時兼輔
参て詠之只寄内裏也
しての山　冥土
又もゝへ山なにくれとよめるはたゝ山の重心なり
嶺
おほしまみね（大嶋）　万
たかまの（高円）　万
あかねか（宵根）　万
みよしのゝ　苔席
いまきの　万

【補考】

『八雲御抄』は順徳天皇による歌論である。ツレは、『平成新修古筆資料集』、『古筆学大成』に見える。後者は、伝二条為重の筆跡として掲載されるが、法量、書風、体裁等を考慮し、ツレと判定した。本断簡の左側に数か所の綴じ穴が確認できることから、もとは綴葉装の見開き右側であったことがわかる。本紙右下部分は手擦れ等によって紙の繊維が撚れており、文字を解読することは困難である。（西片）

46　二条家為兼卿　四半切〔続千載集〕

①「二條家為兼卿（ゆくすゑも）　村守（黒）」分家三代古筆了仲
②楮紙
③二一・四×一五・五センチ
④続千載和歌集　一九六四和歌～一九六六
⑤鎌倉～南北朝時代
⑥京極為兼（京極為教男、一二五四―一三三二）

【翻刻】

ゆくすゑもなをこしかたのまゝならは
いつをわか身のおもひいてにせむ
岩蔵姫宮
わすられぬそのおもひいてもなきものを
なにゆへしのふむかしなるらむ
藤原盛徳
いまさらにむかしをなにとしのふらむ
うきよとてこそおもひすてしか

【補考】

本断簡は体裁を整えるために末尾の詠者名（祝部貞長）が擦り消ちされている。伝称筆者の為兼の名物切としては自撰の勅撰集である『玉葉和歌集』を書した「長柄切」が知られるが、『続千載和歌集』を書写したものは名物切集等のなかにもみえていない。このため異伝についても考慮に入れる必要があるが、管見の範囲ではツレと思しき断簡も見出せない。ただ、書写年代については為兼の時代に近く、鎌倉末から南北朝初期頃と思われる。（高田）

47　二条家為重卿　四半切〔新古今集〕

①「二條家為重卿（わくらはに）　村守（黒）」分家三代古筆了仲
②斐紙
③二五・六×一七・四センチ
④新古今和歌集　一六六一詞書途中～一六六四詠者
⑤室町時代
⑥二条為重（二条為冬男、一三二五―一三八五）

【翻刻】

けるる　　大僧正行尊
わくらはになとかは人のとはさらむ音なし川にすむ身成（も）と
あひしれりける人のくまのにこもり侍けるに
つかはしける　　安法々師
世をいとふ山のみなみの松風に苔の衣や夜さむなる（らむ）
西行法し百首すゝめてよませ侍ける
に　　家隆朝臣
いつかわれ苔の袂に露をきてしらぬ山路の月をみる（へき）
百首哥たてまつりしに山家心を
式子内親王

【補考】

『新古今和歌集』の断簡。もとは冊子本。『古筆学大成』によると、伝称筆者を二条為重とする『新古今和歌集』の断簡は、名物切である「道也切」をはじめとして、計四種類確認できる。そのうち本断簡は、『古筆学大成』所収の「新古今和歌集切（一）」と形式が一番近い。行尾のところで、二、三字が並べて書かれる形式も同様である。書風は少し異なるようにもみえるが、筆線の太細の変化が少なく、重厚で粘り強い線質などが一致する。（李輝）

48　覚源法印　四半切〔雲葉集〕

①「覚源法印（かせふけはは）　村守（黒）」分家三代古筆了仲
②斐紙
③二二・〇×一五・〇センチ
④雲葉和歌集　八二三和歌～八二五上句
⑤鎌倉～南北朝時代
⑥覚源（鎌倉初期の僧、藤原定家男、一二一五？―一二七〇）

【翻刻】

かせふけはうらわのいけにいるしほや
よるのこほりのたえまなるらむ
前内大臣家にて一日百首哥侍しに
湖上氷　　民部卿為家
さゝなみやとをさかりゆくにほのうみは
こほりそうらのしほひなりける
守覚法親王五十首哥よみ侍けるに
寂蓮法師
かちひとのみきはのこほりふみならし

【補考】

ツレを確認できたところでは、『古筆学大成』に六葉、『私撰集残簡集成』に

四葉、『平成新修古筆資料集』に一葉、そして手鑑「霜のふり葉」（徳川美術館蔵）、手鑑「浜千鳥」（出光美術館蔵）に各一葉見られる。その他に大阪青山短期大学蔵のものは冊子本から巻子本に改装されており、巻四夏の大部を一括伝えている。書風は、繊細な筆を運び、いかにも手馴れた書き振りである。『古筆学大成』の解説によると、覚源の遺墨は何一つ残されてはいないため、伝称筆者を覚源とするのは江戸時代における古筆家の単なる擬定にすぎないとされている。断簡の一行目、二行目の上から五文字目「八（は）」、「本（ほ）」の箇所に虫損が見られる。この箇所は裏打紙で補修した上で、後世の筆によって補われている。

（小林）

49　二条家為右朝臣　四半切〔新古今集〕

①「二條家為右朝臣神代には 村守（黒）」分家三代古筆了仲
②斐紙
③二二・九×一四・三センチ
④新古今和歌集　一四八五和歌～一四八七詞書途中
⑤南北朝時代
⑥二条為右（二条為重男、？―一四〇〇）

【翻刻】

神代にはありもやしけむさくらはな
けふのかさしにおれるためしは
いつきのむかしをおもひいて、
式子内親王
時鳥そのかみ山のたひまくら
ほのかたらひし空そわすれぬ
左衛門督家通中将に侍ける時祭
のつかひにてかむたちにとまりて

【補考】

伝称筆者である為右は『新後拾遺和歌集』の撰者を務めた為重（途上で横死）の息子。女性問題を起こして時の権力者足利義満に誅殺された。為右を伝称筆者とする『新古今和歌集』の断簡では国宝手鑑にも押される「豊前切」があるが、本断簡は同筆とはいえない。また、『冷泉家時雨亭叢書』には為右の手によるとみられる『新後拾遺和歌集』が収められるが、こちらとも別筆である。ただ、いずれも趣は似かようところがあり、そこから極められたものと推測する。紙背には後世、断簡になってから書かれた「二条家為右」の墨書がみえる。

（髙田）

50　仁和寺殿道永　六半切〔草根抄か〕

①「仁和寺殿道永しるかりき（印文不読・黒）」初代朝倉茂入
②楮紙
③一一・一×一三・三センチ
④草根集　三八五八、三八五九、三八六二、四三四二、三五九八
⑤室町時代
⑥道永法親王（後土御門天皇猶子、伏見宮貞常親王王子、生歿年未詳）

【翻刻】

しるかりき岡の木のまの夕月
心つくしの秋へとはねと

秋も夜も深行月の宮木（もり）
桂をおらぬ光をしむそ
世をまもる神は光を分（さても）
鷲の高ねに在明の月

擣衣

篠やしのひし秋も夜さむにて
衣擣らし野路のさと人

霧

明はたる山本とをくいる霧の
そこのこゝろよおちこちのさと

【補考】

本断簡は『草根集』の定本と比較すると、歌番号が一続きではないため、抄出本の類か。左側に余白があり、そこに四つの綴じ穴が見られる。綴じ穴が大きく草率な書風から、もとは紙捻などで仮綴じされた冊子本であったと考えられる。『日本書蹟大鑑』に道永の真跡が掲載されているが、転折の箇所が比較的弱い点は類似しているものの、例えば「一の」のように文字の選択状況に若干の相違が見受けられる。そのため本断簡が道永の真跡であるとの断定はしかねる。書は和歌が二行書きで書かれており、漢字を多く使用し行間が狭いところに特徴がある。

（小林）

51　冷泉殿為相卿　松永切〔新勅撰集〕

①「冷泉殿為相卿（かねのをと）　村守（黒）」分家三代古筆了仲
②斐紙
③一六・七×一四・九センチ
④新勅撰和歌集　一一七二詠者～一一七四
⑤鎌倉時代後期
⑥冷泉為相（冷泉家の祖、藤原為家男、一二六三―一三二八）

【翻刻】

按察使隆衡

かねのをとをなにとてむかしうらみ
けむいまはこゝろもあけかたのそら

参議雅経

みのうへにふりゆくしものかねのをと
をきゝをとろかぬあかつきそあき

藤原宗経朝臣

あかつきのかねそあはれをうちそふ
るうきよのゆめのさむるまくらに

【補考】

『昭和古筆名葉集』によると、為相の項に「松永切　新勅撰集二行書」とある。『古筆切影印解説』に「松永切」とされる断簡が掲載されており、本断簡と書風が一致しているため、まさしくこの「松永切」に該当するものと思われる。本断簡の左上部に「冷泉為相」と記された反転文字がある。また右下部に手擦れの跡と思われる汚れが見られるために、見開きの右頁であると考えられる。さらに、最終行の後に次の歌の詞書を一度書いてから消した跡（擦り消ち）が見られる。

（小林）

52　冷泉殿為秀卿　六半切〔夜の寝覚か〕

①「冷泉殿為秀卿（てきよひ返）」村守（黒）分家三代古筆了仲
②斐紙
③一五・六×一六・三センチ
④夜の寝覚　中間欠巻部か
⑤鎌倉後期～南北朝時代
⑥冷泉為秀（冷泉為相男、？―一三七二）

【翻刻】

てきよひ返給ぬれはひめ君たち
の御もとにはなか〳〵ちかきほとにを
はしてつれなく返たまひぬるを
くちをしくおほしけりにほふ
宮御しのひありきを内（朱雀院）の御こ
にもらしそらする人ありて御さ
とすみもこゝろにまかせ給はす内
にのみ御給ころ御いもうとの女一
の宮の御方へまいり給へれは御ゑ

【補考】

現存する『夜の寝覚』は、全体の一部のみであるが、本断簡の書写内容は『夜の寝覚』のうち未詳の中間欠巻部の写本であろうか。ツレは、『古筆学大成』にのみ一葉が確認できる。本断簡左側の余白が多く、また左下に手擦れの跡がみられる点から、もとは冊子本の見開き左側にあったと断定できる。書風は、為秀の生存した鎌倉時代、十四世紀前半のもので、書写年代もそのころとみてよいだろう。また、『昭和古筆名葉集』には為秀卿の項に「六半　源氏」とあるが、本断簡についての記載はない。なお、詳細は『汲古』六十六号掲載の論考（野中直之「伝冷泉為秀筆未詳物語断簡考―『夜の寝覚』の中間欠巻部分の可能性について―」汲古書院、二〇一四年十二月）の通りである。（西片）

53　二条家為定卿　六半切〔新古今集〕

①「二條家為定卿（おのことも）」村守（黒）分家二代古筆了任
②楮紙
③一七・〇×一六・一センチ
④新古今和歌集　三六～三八
⑤鎌倉時代
⑥二条為定（二条為道男、一二九三？―一三六〇）

【翻刻】

おのことも詩をつくりて哥に合侍しに
水郷春を望ト云事
太上天皇
みわたせは山もとかすむみなせ川
ゆふへを秋となに思けむ
春曙といふこゝろを
藤原定家朝臣
春のよのゆめのうきはしとたえて
みねにわかるゝよこ雲の空

【補考】

本来は「みわたせは」の歌の後に、藤原家隆の三十七「霞立つすゑの松山ほのほのと浪にはなるるよこ雲の空」があるが、本断簡では抜けている。「春曙といふこころを」は、家隆の歌の詞書の一部である。ツレは『古筆学大成』、手鑑「集古帖」（徳川美術館蔵）に見られる。「集古帖」所収の断簡は、歌番号が三十四、三十五であることから、本断簡の直前に相当し、繋がる断簡であると推測できる。為定であるとの鑑定であるが、十三世紀後半の書写に推定するのが妥当であろうか。本断簡一行目「おのこ」は「をのこ」の仮名遣いの乱れか。

（西片）

54　高雲軒明融　大四半切〔源氏物語系図〕

①「冷泉廣高雲軒明融左大辨　牛庵（朱）」初代畠山牛庵
「高雲軒明融左大辨　村守（黒）」分家三代古筆了仲

②楮紙

③二九・〇×二〇・〇センチ

④源氏物語系図

⑤鎌倉時代

⑥冷泉明融（冷泉為和男、号は高雲軒）

【翻刻】

左大辨（右イ）
頭中将（少イ）　母おなし　もとは侍従たけかはに頭中将
槙柱上　母中納言におなし
わかなにほたるの兵部郷の上に（なる）宮うせ給ての地
紅梅のおとゝ按察大納言ときこえし時よりかよ
ひそめ給てつゐにきたの北になるまきはしら
は我をわするとわかれをおしみし人也
冷泉院女御　母夕顔の尚侍

【補考】

『源氏物語系図』の断簡。もとは冊子本。タテの寸法が二九・〇センチと大型のため、もとは巻子本とも思われるが、系図のような裏写りが多く見られることから、大型の四半本であったと推定される。また明融を伝称筆者とする『源氏物語系図』の断簡としては、曽根誠一・伊豆野町子「架蔵手鑑の和歌・物語切抄稿」（『九州女子大学紀要』第二十二巻第一号　一九八六年）内で紹介されているが、タテ十七・六センチと小さく、別種の断簡と推定した。

（染谷）

55　下冷泉殿持為卿　四半切〔新古今集〕

①「下冷泉殿持為卿思へとも　村守（黒）」分家三代古筆了仲

②斐紙

③二五・一×一七・四センチ

④新古今和歌集　一一〇九和歌～一一一三詞書

⑤室町時代

⑥冷泉持為（冷泉為尹男、一四〇一―一四五四）

【翻刻】

思へともいはて月日は枕の門さすかにいかゝ忍はつへき
百首歌たてまつりしとき
皇太后宮大夫俊成（イ女）
逢事はかたのゝさとの篠の庵しのに露散よはの床（哉）

入道前関白右大臣に侍けるか時百首哥の
中に忍恋
ちらすなよしの丶葉草のかりにても露かるへき袖の上（かは）
題しらす　藤原元真
白玉か露かと丶はむ人もかな物思袖をさしてこたへむ
女につかはしける

【補考】

『新古今和歌集』の断簡。もとは冊子本。ツレを手鑑「霜のふり葉」（徳川美術館蔵）に一葉確認し、歌番号は一一三四～一一三七であった。そのため、本断簡はツレよりも少々前の部分である。糸綴じの穴が左側にあり、手擦れの跡が本紙右下に確認できるため、元々は見開きの右頁であったと思われる。三行目下部に「イ女」という後の人物によると思われる書き込みがある。（栗原）

56　西行法師　巻子本曽丹集切〔好忠集〕

①「西行法師（ねせりつむ）　村守（黒）」分家三代古筆了仲
②楮紙
③二二・〇×九・一センチ
④好忠集　二十～二十二
⑤平安時代
⑥西行（平安後期から鎌倉初期の僧、佐藤康清男、一一一八―一一九〇）

【翻刻】

ねせりつむはるのわへにたちて（さ）
ひろのもすそのぬれぬまそなき
みやつこにおふるかきねそはるみれは
ふかきみとりのまつは見えける
かたをかのゆきまにねさすわかくさの
はつかにみえし人そこひしき

【補考】

本断簡は上方四本の墨界をひく。『古筆学大成』所収の「巻子本曽丹集切」は下方に一本墨界を有する場合とそうでない場合の二種類がある。これは歌合などの書写において、行頭を統一するために作られた、特別製の料紙であろう。原形を完好に保つもののタテは二五・八センチであり、本断簡よりやや長い。『古筆学大成』によれば、原形は二巻ほどの巻物に書写された『曽丹集』であったと想定される。本断簡での虫損部は、裏紙で補修したうえで、後世の筆によって補っている。（李輝）

57　慈鎮和尚　四半切〔古今集〕

①「慈鎮和尚（あまの）　村守（黒）」分家三代古筆了仲（代筆か）
②斐紙
③二三・五×一四・三センチ
④古今和歌集　七二七詠者～七二九
⑤鎌倉時代初期
⑥慈円（天台宗の僧、藤原忠通男、一一五五―一二二五）

【翻刻】

をの丶こまち
あまのすむさとのしるへにあらなくに

うらみむとのみ人のいふらむ
しもつけのをむね雄宗
くもり日のかけとしなれるわれなれは
めにこそみえね身をはゝなれす
きのつらゆき
いろもなきこゝろを人にそめしより
うつろはむとはおもほえなくに

【補考】

『古今和歌集』の断簡。もとは冊子本。伝称筆者を慈円とする『古今和歌集』の断簡は十数種確認されるが、本断簡は『古筆学大成』所収の「古今和歌集切（十二）」（宇和島伊達文化保存会蔵「手鑑」所収）のツレにあたる。また本断簡二首目三句目の「われなれは」の「は（八）」の字は、もとは「や」の字が書かれていたものが後世に擦り消ちされ、その上に補筆がなされたようで、墨色が異なることにも注意したい。（野中）

58　藤原秀能　四半切〔古今集〕

①「藤原秀能くもゐにも　村守（黒）」分家三代古筆了仲
②楮紙
③二四・〇×一六・五センチ
④古今和歌集　三七八詞書途中～三七九
⑤鎌倉時代
⑥藤原（大屋）秀能（藤原秀宗男、一一八四―一二四〇）

【翻刻】

かりけるをゝくるとてよめる
ふかやふ
くもゐにもかよふ心のをくれねは
わかると人に見ゆ許也
とものあつまへまかりける時によめる
よしみねのひてをか
白雲のこなたかなたに立わかれ
心をぬさとくたくたひ哉

【補考】

藤原秀能とする名物切では『古今和歌集』を書写した「佐伯切」がある。「佐伯切」に加えて、伝称筆者を秀能とする『古今和歌集』の古筆切が『古筆学大成』に数種類挙げられているが、本断簡はそれらいずれとも同筆とすることはできない。書風はもとより小粒の字が多く用いられている点のほか、頁・行間のゆとりなどに雰囲気の似通うところが認められるため、秀能と極められたものではないかと推察する。ツレについても管見の範囲では見出しえない。（髙田）

59　甘露寺殿資経卿　四半切〔詞花集〕

①「甘露寺殿資経卿まこもくさ　村守（黒）」分家三代古筆了仲
②楮紙
③二三・五×一五・二センチ
④詞花和歌集　一二和歌～一四
⑤鎌倉時代
⑥藤原資経（甘露寺家の遠祖、藤原定経男、一一八〇―一二五一）

【翻刻】

まこもくさつのくみわたるさはへには
つなかぬこまもはなれさりけり
そうつかくか
もえいつるくさはのみかはをさゝはら
こまのけしきも春めきにけり
天徳四年内裏哥合に柳をよめる
平かねもり
さほひめのいとそめかくるあをやきを
ふきなみたしそはの山かせ

【補考】

『詞花和歌集』巻一の冒頭に近い部分を書写した断簡。汚れの状況ならびに紙背の歌から冊子時には右頁であったものとおもわれる。『古筆切影印解説』には、本断簡と非常に近い部分を書写したツレ（歌番号：十六～十七）がみえている。資経を伝称筆者とする断簡では『古筆切目安』などにもみえる「堀河院御時百首和歌」を書写した歌切（「中井切」）がもっとも多いが、その半面、勅撰集を書写した断簡は少ない。『詞花和歌集』を書写した断簡も管見の範囲では本断簡と前掲の断簡の二葉を数えるのみであり、貴重な一枚といえる。

（高田）

60　世尊寺殿行能卿　未詳経切

①「世尊寺殿行能卿破二観之 村守（黒）」分家三代古筆了仲（代筆か）
②楮紙
③二五・二×四・七センチ
④未詳経
⑤鎌倉時代
⑥世尊寺行能（藤原伊経長男、一一七九―一二五五？）

【翻刻】

破二観之執不如中道観破中道執炙在空
假二観乎三観囿融只可浮一心問三観正

【補考】

伝称筆者を世尊寺行能とする古筆切は非常に多く存在する。しかし、その多くは歌切であり、経切については小林強氏による『出典判明仏書・経切一覧稿』でも、『華厳経』の断簡数葉が紹介されるのみである。また、それ以外では未詳の経典が書されたものとして、手鑑「藁叢」（徳川美術館蔵）所収の一葉があげられるが、箔が撒かれた装飾経であり本断簡とは別種であった。よって本断簡のツレは見出せなかった。

（野中）

61　後小松院　四半切〔伊勢物語〕

①「後小松院むこかね 重（黒）」分家初代古筆了雪
②斐紙
③二四・一×一六・二センチ
④伊勢物語　十段途中～十二段途中
⑤室町時代
⑥後小松天皇（第一〇〇代天皇、後円融天皇第一皇子、一三七七―一四三三）

【翻刻】

むこかねかへし

十五　わかたよるとなくなるみよしの、
たのむのかりをいつかわすれむ
となむ人のくに、てもなほか、る事なむ
やまさりける
むかしおとこあつまへゆきけるにともたち
ともにみちよりいひをこせける
十六　わするなよほどは雲ゐになりぬとも
そらゆく月のめくりあふまて
むかしおとこありけり人のむすめをぬすみ
てむさしのへゐてゆくほとにぬす人なり

【補考】

分家初代古筆了雪は、後小松天皇の筆と鑑定し、その書風はまさしく天皇在位にあたる室町時代、十五世紀初期の様式を示す。しかし、真跡と比較すると自筆とはいいがたい。本断簡と『古筆学大成』所収の伝後小松院筆「伊勢物語切」と書風が類似している。二行目の上部に「十四」の反転した文字がみられることから、もとは見開きの左貝であり、さらに右部を数行切っているものと思われる。（李輝）

62　頓阿法師　四半切〔古今集〕

①「頓阿法師（うちわたす）」村守（黒）」分家三代古筆了仲
②斐紙
③二三・八×一六・七センチ
④古今和歌集　一〇〇七～一〇一〇
⑤鎌倉～南北朝時代
⑥頓阿（鎌倉から南北朝時代の僧、和歌四天王の一人、一二八九―一三七二）

【翻刻】

旋頭歌
題知らず　読人不知
うちわたすたちかた人にものまうす我そのそこにしろくさけるは
なにの花そも
返し
春されは野邊にまつさくみれとあかぬ花まひなしに
た、なのるへき花のな、れや
題不知
はつせ川ふる川のへにふたもとある枚年越へて又もあひみふたもとあるすき
貫之
君かさすみかさの山のもみちはの色神無月しくれの雨のそめるなりけり

【補考】

『古今和歌集』の断簡。本断簡の三行目四字目「た」の右に朱による「お」および行頭をはじめとした所々に合点が見られる。特に訂正された「た」は、変体仮名「於」を写し間違えたためか。本断簡の六行目と七行目の間に綴じ穴が確認でき、また和歌が続いていることを踏まえ、もと綴葉装時の見開き中心部の一紙であったことが窺える。頓阿を伝称筆者とし、『古今和歌集』を書者内容とする古筆切は多く、本断簡は和歌を一行に詰めて書いている。『古筆切影印解説』、美保神社蔵「手鑑」、手鑑「筆林」（三井文庫蔵）などに確認できたが、いずれも掲出断簡とは別種の切であり、ツレとは判断しがたい。（大澤）

63　兼好法師　四半切〔僻案抄〕

①「兼好法師あやをは　村守（黒）」分家三代古筆了仲
②楮紙
③二四・七×一六・〇センチ
④僻案抄（後撰和歌集二六二注途中、四〇六注途中）
⑤鎌倉時代
⑥吉田兼好（和歌四天王の一人、卜部兼顕男、一二八三―一三五二）

【翻刻】

あやをはたれかきるとよめる也
あやとは綾也あやしといふ心とは
ならはす
山かせのふきのまに〳〵もみちはゝ
このもかのもにちりぬへら也
ふきのまに〳〵とはたゝふくまゝ
にといふおなし心也すへてまに〳〵
とは随意とかきてまに〳〵とよむ
也君かまに〳〵神のまに〳〵御心に

【補考】

藤原定家によって嘉禄二年（一二二六）に成立したとされる『僻案抄』の断簡。本断簡は、和歌の四天王の一人である吉田兼好を伝称筆者とする。『古筆学大成』には同じく兼好と伝える『僻案抄』の断簡が掲載するが、別種の断簡である。しかし、同大成掲載である伝頓阿筆「僻案抄切」（個人蔵・未装）は、和歌および注釈の書出しの高さが本断簡と一致し、また「あ」「と」「は」「や」などの多くの文字でも一致することからツレと判断した。まさしく異伝であった。なお、本断簡の書出し三行の注釈は、『後撰和歌集』二六二「秋くれば野もせに虫のおりみだるこゑのあやをばたれかきるらむ」に添えられていたものである。

（野中）

64　浄弁律師　四半切〔古今集〕

①「浄弁律師あふからも　村守（黒）」分家三代古筆了仲
②楮紙
③二三・四×一六・二センチ
④古今和歌集　四二九～四三二詞書
⑤鎌倉時代
⑥浄弁（天台宗の僧侶、和歌四天王の一人、？―一三五六？）

【翻刻】

からもゝの花　ふかやふ
あふからも物は猶こそかなしけれわかれむ事をかねておもへは
たちはな　をのゝしまかけ
あし引の山たちはなれ行雲のやとりさためぬ世にこそありけれ
をかたまの木
とものり
みよしのゝ吉野の瀧にうかひいつるあわをか玉のきゆとみつらむ
やまかきの木

【補考】

『古今和歌集』の断簡。もとは冊子本。ツレを『古筆切影印解説』に一葉確

認し、歌番号は三一四～三一六で冬歌の冒頭である。糸綴じの穴が右側にあるため、元々は見開きの左頁であったと思われる。墨による振り仮名「ひき」「たき」のほか、下部には淡墨による大きな書き込みが二か所あるのが確認できる。

（栗原）

65　慶運　四半切〔新古今集〕

①「慶運（和歌四天王内としふれは）」村守（黒）」分家三代古筆了仲
②楮紙
③二三・四×一五・九センチ
④新古今和歌集　八五二和歌～八五四詞書途中
⑤鎌倉時代～南北朝時代
⑥慶運（和歌四天王の一人、生卒年不詳）

【翻刻】

イ　としふれはかくもありけりすみそめの
ロ　こは思ふてふそれかあらぬか
　　おもひにて人の家にやとれりける
　　をその家にわすれ草のおほく
　　侍けれはあるしにつかはしりける
　　中納言兼輔
ハ　なき人をしのひかねてはわすれ草
　　おほかるやとにやとりをそする
　　にしつみてひさしくこもり

【補考】

『新古今和歌集』の断簡。もとは冊子本。行頭に撰者名注記として「イ」（藤原定家）、「ロ」（藤原家隆）、「ハ」（藤原有家）と部首や漢字の一部で示している。三代目古筆了仲により慶運とされ、ツレについては『古筆切影印解説』に二代目了任の極札がついた断簡が二葉、『平成新修古筆資料集』に一葉確認できた。一見して筆跡が異なる印象を受けるが、詠者名の漢字の筆意を比べると楷書に近い特色がある。小林強氏のご教示により、『古筆学大成』の二条為兼を伝称筆者とする「新古今和歌集切」からも同様の筆意が確認できた。またその他の書風も同じであることから本断簡のツレとして扱ってよいと思われる。まさしく異伝となろう。書写年代は鎌倉末期から南北朝にかけての頃と推定され、時代的には慶運の活躍していた時期と適合する。

（大澤）

66　徹書記正徹　四半切〔古今集〕

①「徹書記正徹（をのといふ）」村守（黒）」分家二代古筆了任
②斐紙
③二六・〇×一九・一センチ
④古今和歌集　二九九詞書途中～三〇一
⑤室町時代
⑥正徹（室町時代中期の臨済宗の歌僧、一三八一―一四五九）

【翻刻】

　　をのといふ所にすみ侍ける時にみちを見て
　　よめる　　貫之
　秋の山紅葉をぬさと手向れはすむ我さへそ旅心地（する）
　神なひの山を過て立田河をわたりける

時に紅葉のなかれけるを見てよめる
きよはらのふかやふ
神なひの山を過行秋なれは龍田河にそぬさはたむくる
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
藤原おきかせ
しら浪に秋の木葉のうかへるをあまのなかせる舟かとそ見る

【補考】

『古今和歌集』の断簡。もとは冊子本。同じく伝称筆者を正徹とする『古今和歌集』の断簡は、『古筆切影印解説』所載の四半切が一葉確認できる。寸法および行間等が一致するほか、特徴的な字形の「す」「み」「む」「を」など多くの文字で酷似するため、本断簡とはツレであると推定される。またこれらの特徴的な字形は、正徹自筆とされる懐紙や短冊などでも見られることから、本断簡は正徹自筆とみて差しつかえあるまい。墨色は比較的単調で、室町時代の古筆に多く見られる書風である。（染谷）

【主要参考文献】

・小松茂美『古筆学大成（全三十巻）』（講談社　一九八九年～）
・古筆手鑑大成編集委員会『古筆手鑑大成（全十六巻）』（角川書店　一九八三年～）
・小松茂美『日本書蹟大鑑（全二十五巻）』（講談社　一九七八年～）
・新編国歌大観編集委員会『新編国歌大観（全十巻）』（角川書店　一九八三年～）
・佐佐木信綱『日本歌学大系（全十巻）』（風間書房　一九五六年～）
・久曾神昇ほか『日本歌学大系・別巻（全十巻）』（風間書房　一九五九年～）
・徳川黎明会『徳川黎明会叢書　古筆手鑑篇一～五』（思文閣出版　一九九五年～）
・久曾神昇『古筆切影印解説（全四巻）』（風間書房　一九九五年～）
・藤井隆・田中登『国文学古筆切入門（三部作）』（和泉選書　一九八五年～）
・伊井春樹『古筆切資料集成（全六巻）』（思文閣出版　一九八九年～）
・田中登『平成新修古筆名葉集一～五』（思文閣出版　二〇〇〇年～）
・毎日新聞社至宝委員会事務局『皇室の至宝東山御文庫御物（全五巻）』（毎日新聞社　一九九九年～）
・久曾神昇『源氏物語断簡集成』（汲古書院　二〇〇〇年）
・古谷稔『古筆手鑑・披香殿』（淡交社　一九九九年）
・永青文庫『細川家永青文庫叢書　別巻　手鑑』（汲古書院　一九八五年）
・久保木哲夫ほか『古筆手鑑叢刊Ⅰ　宮内庁書陵部蔵　古筆手鑑』（貴重本刊行会　一九九九年）
・『出光美術館蔵品図録　書』（平凡社　一九九二年）
・伊井春樹・大阪大学古代中世文学研究会編『古筆切集　浄照房蔵』（和泉書院　一九八八年）
・村上翠亭・高城弘一ほか『古筆鑑定必携　古筆切と極札』（淡交社　二〇〇四年）
・小林強・高城弘一『古筆切研究　第一集』（思文閣出版　二〇〇〇年）
・小林強『出典判明仏書・経切一覧稿』（大東文化大学人文科学研究所　二〇一〇年）
・伊井春樹『新版古筆名葉集』（和泉書院　一九八八年）
・高城弘一『覆刻　昭和古筆名葉集』（大東文化大学人文科学研究所　二〇一二年）
・『やまとうた一千年　古今集から新古今集の名筆をたどる』（五島美術館　二〇〇六年）

・『大東文化大学所蔵　貴重書跡図録目録Ⅰ』
（大東文化大学大学院文学研究科書道学専攻　二〇一一年）
・高田信敬「古筆切目安（翻字・索引・解題）」
（『鶴見大学紀要』第二三号　一九八六年）
・武田則夫「翻刻古筆切名物」（『ＭＵＳＥＵＭ』二三六号　一九七〇年）